

令和5年度
入 学 試 験 問 題

第1回
国 語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしゃ}の指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}は一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから19ページまであります。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	----------------	--

森村学園中等部

一 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「今日のテーマは『私たちはオンラインの環境を制限した方がよいのか』です。グループに分かれて、一〇分くらい議論してください」
教員の掛け声とともに、学生が気だるそうに移動する。

「オンラインの制限だってよ。どうする？」

「どうしよっか」

「強制とか制限っていうより、人それぞれでよくね？」

「そうだよなあ……」

皆さんも誰かと話しているときに、つい「人それぞれ」と言ってしまうことはありませんか。ここにあげたような会話は、こんなに、いたるところで見られます。この章では、あるていど顔を見知った関係のなかで展開される「人それぞれ」のコミュニケーションに注目していきます。

「一人」になれる条件が整い、人びとの選択や決定が尊重されるようになった社会では、さまざまな物事を「やらない」で済ませられるようになります。ある行為を「やらねばならない」と迫る社会の規範は緩くなり、何かを「やる」「やらない」の判断は、個々人にゆだねられます。

この傾向は人間関係にも当てはまります。私たちが生きる時代は、閉鎖的な集団に同化・埋没することで生活が維持されてきたムラ社会の時代と違います。生活の維持は、身近な人間関係のなかではなく、お金を使って得られる商品やサービスと、行政の社会保障にゆだねられるようになったのです。

このような社会では、誰かと「付き合わなければならない」と強制される機会が、徐々に減っていきます。会社やクラスの懇親会への参加はもはや強制される時代ではありません。地域の自治会への加入も任意性が強くなりました。趣味のサークルを続けるか続けないかは、まさに「人それぞれ」でしょう。

誰と付き合うか、あるいは、付き合わないかは、個々人の判断にゆだねられています。俗っぽく言えば、私たちは、（嫌な）人と無理に付き合わなくてもよい気楽さを手に入れたのです。

今や、人と人を結びつける材料を、生活維持の必要性に見出すことは難しくなりました。人と人を結びつける接着剤は、着実に弱くなっているのです。

(A)、このような社会で、つながりを維持するにはどうすればよいのでしょうか。^①生活維持の必要性という、人と人を強固に結びつけてきた接着剤は弱まっています。そうであるならば、私たちは、目の前の関係をつなぎ止める接着剤を新たに用意しなければなりません。そこで私たちは、弱まってきた関係をつなぎ止める新たな補強剤として、つながりに大量の「感情」を注ぎ込むようになりました。

このような傾向は、メディアからも読み取ることができます。日本映画界の巨匠、小津安二郎監督の作品に、^②『長屋紳士録』という短い映画があります。この映画は、終戦から二年後の一九四七年に公開されました。当時は、東京下町を舞台にした人情劇と評価されています。簡単にあらすじを紹介しましょう。

おもな登場人物は、長屋の住人と少年です。物語は、長屋に住む女性のところに、実の親とはぐれてしまった子どもが届けられるところから始まります。そのさい、長屋のその他の住人とひと悶着あるのですが、結局、女性が少年の面倒を見ることになります。

最初は子どもの世話を嫌がっていた女性も、だんだんと情が移り、子どもをかわいらしく思ってきます。しかし、その矢先に、子どもを探していた実の親が登場し、女性と子どもの間に別れが訪れます。子どもが去った後、女性はあらためて親子のつながりのよさに気づく、というのが大まかなあらすじです。

長屋の住人は、鍵もかけず、お互いの家にしょっちゅう行き来をし、何かにつけ雑談をします。親子のつながりや、長屋の住人どうしの密接な交流。こういった言葉からは、「昔ながらの温かなつながり」を想像することができます。

(B)、今の人びとが見ると、この映画に対してかなりの違和感を抱くでしょう。その理由は、登場する人びとの感情的な交流の少なさにあります。

人情劇であるこの映画のなかで、スキンシップと言いうる場面は、少年が女性の肩をたたくシーン以外、いっさいありません。感情的な交流の少なさは、実の親と子どもの再会のシーンに集約されます。

物語のクライマックスである親子の再会、および、少年と女性との別れは、現在の感覚からすると、さぞ感動的に演出されるのではないかと思います。しかし、『長屋紳士録』において、そのような表現はまったくありません。

再会を果たした親子は、互いに駆け寄ることも、抱き合うこともありません。それどころか親は、近寄る子どもを手で押しつけ、女性に詫言と御礼の挨拶をすることを優先させます。(C)、儀礼を優先しているわけです。

子どもと女性の別れのシーンでも、涙や抱擁はいっさい見られません。少年が「オバチャンサヨナラ」とぶつきらぼうに述べ、別れのシーンは終わります。ここから、「人情劇」と言われた映画でさえも、感情表現は非常に乏しいことがわかります。

この映画を見た学生は、「昔のつながりは濃密だけど感情や気遣いが薄く、今のつながりは希薄だけど、感情や気遣いが濃い」と述べていました。この言葉は、感情に満たされた今の人間関係をよく表しています。

しかし、感情に補強されたつながりは、それほど強いものにはなりません。私たちは、相手とのつながりを「よい」と思えば関係を継続させるし、「悪い」と思えば関係から退くこともできます。^③この特性のおかげで、私たちは、無理して人と付き合わなくてもよい気楽さを手にしました。理不尽な要求や差別的な待遇から逃れやすくなったのです。しかし、人と無理に付き合わなくてもよい気楽さは、つながりから切り離される不安も連れてきてしまいました。

お互いに「よい」と思うことで続いていくつながりは、どちらか、または、両方が「悪い」と思えば解消されるリスクがあります。放っておいても行き来がある長屋の住人とは違うのです。このような状況で関係を継続させるには、お互いに「よい」状況を更新してゆかねばなりません。つまり、つながりのなかに「よい」感情を注ぎ続けねばならないのです。

この特性は、その人にとって大事なつながりであればあるほど強く発揮されます。私たちは、大事なつながりほど「手放したくない」と考えます。しかし、あるつながりを手放さないためには、相手の感情を「よい」ままで維持しなければなりません。大事な相手とつながり続けるためには、関係からマイナスの要素を徹底して排除する必要がありますがあるのです。

とはいえ、個々人の心理に規定される「よい」状況は、社会に共有される規範ほどには安定していません。社会のルールはなかなか変わりませんが、個人の感情は日によって変わることもあります。何かの拍子に、ふと、「悪い」に転じてしまうこともあるのです。つまり、人と無理に付き合わなくても良いつながりは、ふとしたことで解消されてしまう不安定なつながりとも言えるのです。

かといって、目の前のつながりを安定させる最適解は、そう簡単に見つかりません。人の心を覗くことはできませんから。

コミュニケーションの指南書が書店に並び、「^{*}コミュニケーション力」や「^{*}コミュニケーション障」といった俗語が流布する現状は、^⑤コミュニケーションにまつわる人びとの不安を物語っています。私たちは、人間関係を円滑に進めてゆく行動様式がはつきり見えなまま、相手の心理に配慮しつつ、コミュニケーションを行う厄介な状況にさらされているのです。

^⑥この厄介な状況に対処するにあたって重宝されてきたのが、「人それぞれ」を前提としたコミュニケーションです。私たちは、たとえば相手の見解が、自身の見解と異なっていたとしても、「人それぞれ」と解釈することで、対立を回避することがができます。あるいは、相手の行動が自身にとって理解できないものであっても、「人それぞれ」とすることで、問題化することを避けられます。

(中略) 個の尊重を前提とした「人それぞれの社会」では、相手を否定しないことに加え、自らの考えを押しつけないことも求められます。それぞれの意思を尊重する社会では、意見を押しつけず、それぞれの考え方を緩やかに認めることが肝要なのです。

このような環境では、たとえば、自身はオンラインを制限した方がよいと思っていたとしても、それを表明すると、考えの押しつけになってしまいます。「人それぞれ」のコミュニケーションは、このようなときにも重宝されます。というのも、「人それぞれ」という言葉を使っておけば、自らの立ち位置を守りつつ、相手の意思を尊重することも可能だからです。

不安定なつながりのなかを生きる私たちは、「人それぞれ」という言葉を使って、お互いの意見のぶつかり合いを避けています。このよう
ななかで率直に意見を交わし、議論を深めるのは、そう簡単ではありません。

(石田光規『人それぞれ』がさみしい』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) * 人情劇……人間の情感を表現している劇。

* 最適解……最もよい答え。

* 指南書……教え導く本。

* コミュ力……言葉などによって、互いに考えなどを伝える力。

* コミュ障……人と話したり人の話を聞いたりするのが苦手なこと。

問一 (A) (C) に当てはまる語として適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえば イ つまり ウ あるいは エ では オ しかし

問二 ①「生活維持の必要性という、人と人を強固に結びつけてきた接着剤は弱まっています」とありますが、その原因を筆者はど

のように考えていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 生活の維持のために必要だった社会の規範が緩くなり、「やる」「やらない」の判断が個人にゆだねられるようになったから。
イ 生活の維持のために人々を結び付けていたサービスや社会保障が、今ではお金を払えば容易に得られるようになってきたから。
ウ 生活の維持はお金を払って得られるサービスや行政の社会保障にゆだねられ、身近な人と助け合う必要性が薄れてきたから。
エ 生活の維持のために不可欠だった自治会への加入が強制されなくなり、参加は個人の判断に任されるようになってきたから。

問三 ———— ②『長屋紳士録』という短い映画があります」についてあとの問いに答えなさい。

(1) この映画の内容とそこから読み取れることの説明として明らかに誤っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 再会の場面で親が近寄ってくる子どもを手で押しのけて女性に挨拶をしたことから、当時の人々は儀礼を大切にしていたことが読み取れる。

イ 再会を果たした親子が互いに駆け寄ることも抱き合うこともなかったことから、当時の親子の感情表現があまり豊かでなかったことが読み取れる。

ウ 長屋の住人は、鍵もかけずお互いの家にしょっちゅう行き来していたことから、当時は住人どうし密接な関わりがあったことが読み取れる。

エ 少年が「オバチャンサヨナラ」と別れ際にぶつきらばうに述べたことから、当時の少年は大人に対して礼儀に欠ける態度をとっていたことが読み取れる。

(2) 筆者がここで、この映画を紹介したのは、どのような意図によりますか。筆者の意図の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 昔は人々のつながりが濃密だったことを例示し、現代人が失った人間関係の濃密さを取り戻さなければならないという、自分の主張を印象づけるため。

イ 昔は感情表現が希薄だったことを例示し、現代の人間関係を結び付けているものが生活の維持の必要性から感情へと変わってきたという自説を裏付けるため。

ウ 昔は地域の結びつきが強かったことを例示し、現代の人間関係が個々人の判断にゆだねられ、地域に縛られない気楽さを手に入れたことを再確認するため。

エ 昔の人間関係は気遣いが乏しかったことを例示し、現代の濃密な気遣いによって結び付けられた人間関係と比較させ、理想的な人間関係のあり方を示すため。

問四 ———— ③「この特性」とありますが、どのようなことを指していますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア

好きな相手と嫌いな相手とで、つきあいかたを自在に変えられるということ。

イ 感情によって結びついた人間関係は、言葉で表現しなくても深いということ。

ウ 人と人とはどんな関係を結ぶかは、お互いに相談して決められるということ。

工 相手との関係が続けるのもやめるのも、本人の意思次第であるということ。

問五

——④「お互いに『よい』状況を更新してゆかねばなりません」とありますが、これは、どのようなことを指していますか。その事例として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ある会社では、顧客へのサービスとして、毎年自社製品の優待セールを実施して好評である。

イ まもなく還暦を迎える父に贈るプレゼントを選ぶために、久しぶりに兄弟姉妹が集まって相談する。

ウ メールでのやりとりが増えている今でも、大切な友人には自筆の年賀状を送るように心がけている。

エ 仲の良いグループ内のメールやLINEには、たとえ勉強中であってもすぐに返信するようにしている。

問六

——⑤「コミュニケーションにまつわる人びとの不安」とありますが、人びとが抱く不安とは、どのようなものですか。その内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア つながってほしい人に自分の言葉がどう伝わっているか簡単にはわからず、自分の本当の気持ちを理解してもらえないのではないかという不安。

イ つながってほしい相手にどうすれば自分との関係を良いものだと思ってもらえるか簡単にはわからず、いつかそのつながりを解消されてしまうのではないかという不安。

ウ つながってほしい人が濃密な関係をきらっているのかどうか簡単にはわからず、自分が相手にうつとうしいと思われているのではないかという不安。

エ つながってほしい人とどうすれば気楽に話せるのか簡単にはわからず、自分の喜怒哀楽の表現が不安定になってしまっているのではないかという不安。

問七

——⑥「この厄介な状況に対処するにあたって重宝されてきたのが、『人それぞれ』を前提としたコミュニケーションです」とありますが、『人それぞれ』を前提としたコミュニケーションはなぜ「重宝」されているのですか。その理由を二つ、それぞれ二十字以上二十五字以内で答えなさい。

問八 この文章の構成の特徴として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 最近さまざまな場面で使われる「人それぞれ」という言葉を取り上げ、その言葉の背後に潜む、現代人のコミュニケーションにまつわる不安な心理を科学的に解き明かし、筆者の考える望ましい人間関係のあり方を読者に訴えている。

イ 最近だれもが口にする「人それぞれ」という言葉に注目し、それを人々が使うようになるまでの歴史的な経緯を複数の資料を比較しながら検証し、個人の意思が尊重される現代においてこの言葉が重宝される意義を明らかにしている。

ウ 最近よく耳にする「人それぞれ」という言葉に着目し、なぜ現代の人々がこの言葉を多用するようになったのかを、現代と昔の間関係を比較する中で明らかにし、不安定なつながりの中で生きる現代人が抱える問題を提示している。

エ 最近よく耳にする「人それぞれ」という言葉がどのような場面で使われるのかを例を挙げながら検証し、現代人が失った昔の濃密なつながりを取り戻すためにはどうすべきかを、昭和の人情劇を手がかりに読者に考えさせようとしている。

問九 次の会話は、この文章を読んだ先生と生徒が話をしている場面です。これを読んで、あとの(1)・(2)の問いに答えなさい。

Aさん 「たしかに最近『人それぞれ』ってよく耳にするわ。」

Bくん 「そうだね。きのう友だちに英会話を習おうってさわれたけど、自分は英語のラジオ講座が気に入っているんだ。勉強法も『人それぞれ』ってことで盛り上がったな。」

Aさん 「それはそうかもしれないけど、この間『学芸会のクラスの出し物』を決めるときに、なかなか決まらなくて『もう人それぞれでいいじゃん』って言われたときは困っちゃった……」

Bくん 「ああ、『学芸会のクラスの出し物』は『人それぞれ』ってわけにはいかないよね。だって、―― A ―― から。」

Cくん 「そうか。『人それぞれ』だとよくないこともあるね。そういえば以前、アメリカの銃規制の問題について何かで読んだことがあるけど、武器をもつか、もたないかが『人それぞれ』だと問題があるんじゃないかな。」

先生 「お、いいところに気づいたね。実は筆者は同じ本の中で、人びとが自由に行動した結果、社会としての損失が大きくなる現象を『社会的ジレンマ』と述べているんだ。護身用に『人それぞれ』の意志で銃をもつことはできても、全員が武器をもつとかえって社会の治安は悪化してしまう。また、武器の開発も活発になってしまう。こういう事態は、それぞれの人にとってよくない、というわけだね。」

Aさん 「そういう『社会的ジレンマ』って、ほかにもありそうだなわ。」

(1) ―― A ―― にあてはまる理由を自分で考えて書きなさい。

(2)

『社会的ジレンマ』の例としてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人々が混んだ電車を避け、マイカーで自由に移動すると、渋滞したり温室効果ガスが多く発生したりする。
- イ 献血けんけつをするかしないかは人それぞれだが、輸血用の血液が集まらなないと患者かんじゃが助からないこともある。
- ウ 一人一人好きな職業をめざして努力することはできるが、芸人になろうとしても必ずしも売れるわけではない。
- エ ゴミの分別が面倒めんどろでまとめて処分してしまうと、リサイクルしにくかったりゴミの量が増えたりする。

【二】和泉和恵は児童養護施設「あしたの家」の職員です。以下は、和泉が新人だった頃、彼女の指導担当であった猪俣との思い出を振り返っている場面です。なお、児童養護施設とは、保護者がいない、保護者から虐待を受けている、などの事情により社会的な養護が必要な子供たちが生活している施設です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

【場面①】

和泉が『あしたの家』に就職したのは、二十五歳の頃だ。（中略）

指導職員は猪俣だった。痩せぎすで顔の輪郭も尖っている猪俣は、一見すると陰気でとっつきにくそうに見え、最初は苦手意識があった。（中略）

【場面②】

ある日、中学生の女子が問題行動を起こした。門限後に施設を抜け出そうとしたのだ。門扉を乗り越えようとしているところを近隣の住民に通報され、門扉のてっぺんにまたがった状態で職員に取り押さえられた。

和泉は残業で居残っており、猪俣は宿直だったので聞き取りに立ち会った。副施設長の梨田も近所に住んでいたので駆けつけ、鬼のような形相で女子をとっちめた。

梨田は近隣からの評判を常日頃から気にかけており、子供の素行に厳しい。住民に通報されて夜遊びが発覚したとあってはなおさらだ。どうしてこんなことをしたんだと薄い髪から透ける地肌が真っ赤になるほど怒っている梨田に、女子は膨れっ面のまま何も言わなかった。

「黙り込んでやり過ぎると思うな！ どこに行こうとしてんだ！」

梨田が怒鳴れば怒鳴るほど、女子は頑なに①貝になり、やがて梨田の怒声にも疲れが見えはじめた。そのときである。

「何しに行きたかったんだ？」

それまで黙っていた猪俣が、世間話のような口調で尋ねた。

すると、それまで断固として貝だった女子の唇が、物言いたげにもぐもぐした。

②ここを先途とばかりに声を荒げようとした梨田を、猪俣が手振りで止めた。無言で片手を軽く挙げただけだ。その仕草に一体どんな魔法が籠められていたのか、梨田は本意そうにではあったが押し黙った。

「……ダイコク」

女子が眩つぶやいたのは、歩いてほんの十分ほどのところにあるドラッグストアの店名である。夜は十一時まで開いている。

「何でダイコク行きたかったんだ」

やっぱり世間話のように尋ねた猪俣に、女子はふて腐くされた様子で答えた。

「ニキビできたから」

言われてみると、小鼻の横にぽつんと赤いニキビがある。

「ニキビの薬、買いに行きたかったのか」

猪俣の問いに、女子はこくんと頷うなずいた。

梨田が苦々しそうに吐はき捨すてる。

「潰つぶしとけ、そんなもん！」

「跡あとになっちゃうじゃん！」（中略）

「職員室の救急箱にもお薬あるよ」

和泉としては助け船のつもりで口を出したが、途端とたんに女子に睨にらまれた。

「あんなの効かないもん！」

苛立いらだったように梨田が息を吸った。「贅沢ぜいたく言うな」「わがまま言うな」辺りが飛び出すはずだったのだろうが、機先を制するようにまた猪俣

が口を開いた。

「どれなら効くんのだ？」

女子は救いの手が差し伸べられたような眼差まなざしで猪俣を見上げた。

「緑と青のチューブのやつ」

「名前は？」

「分かんないけど……見たら分かる。学校で友達が貸してくれたとき、すぐ治った」

そして③女子は泣きそうな顔で俯うつむいた。「明後日までに治らないと」と眩くらいた。

「じゃあ先生と買いに行くか」

「猪俣先生！」

梨田は目を吊り上げて咎とがめたが、猪俣は「いいじゃないですか」と引かなかった。

「夜遊びが目的じゃなかったんだから、今回は大目に見ましようよ。思春期の子供がたくさんいるんだから、救急箱にニキビの薬が入っててもいいでしょうし」

その代わり、と女子に向き直る。

「今度からはちゃんと言うんだぞ」

女子は輝くような笑顔で頷いた。猪俣に連れていってもらったドラッグストアで緑と青のチューブの薬を買ってもらい、ご機嫌で帰ってきた。

「イノうちに連れてってもらってよかった！ 自分のお金じゃ足りなかった！」

そして、人生最大の仕事のように、洗面所で小鼻のニキビに薬を塗って、職員室で「ごめんなさい」と頭を下げて居室に戻った。梨田が不機嫌に帰宅してから、和泉は猪俣に尋ねた。

「どうしてあの子のわがままを聞いてあげたんですか」

猪俣は陰気な顔で陰気に笑った。――顔の造りでだいぶ損をしている。

④「明後日が遠足なんですよ。憧れの男の子と同じ班になったそうです」

もう遠い日になった中学生の時分が巻き戻った。ニキビがひとつできたかどうかで人生が憂鬱になった。好きな男子が同じクラスにいたらなおさら。――それが特別なイベントに絡むなんて、人生が終わってしまうほどの絶望だった。

「子供が思い詰めているときは、子供なりの正当な理由があるものです。ニキビの薬一つで夜の抜け出しをしないと約束してくれるなら安いものでしょう」

その後しばらくして、梨田は救急箱に常備してほしい薬のアンケートを子供たちに取った。

「またあんなくだらない脱走騒ぎが起きたら敵わん」と苦虫を噛みつぶしながらではあったが。

今年で高校一年になるその女子は、それからは似たような騒ぎを一度も起こしていない。

【場面③】

「和泉先生はどうして児童養護施設で働こうと思ったんですか」

世間話で猪俣に問われたとき、採用面接用の肩肘張った志望動機ではなく、心の中にしまっておいた本当の動機を話す気になったのは、ニキビの一件があったからかもしれない。

中学生の女子のニキビの一大事を大真面目に処理した猪俣だったら、笑わず聞いてくれそうな気がした。

「高校生のとき、同じクラスに好きな男の子がいたんです。ちよつと陰のある雰囲気……」

大人っぽくてかっこいい、と最初はそんな単純な憧れ方だった。クラスのイベントで同じ係になり、よく喋るようになって話が合った。思春期の好きが坂道を転がり落ちるきっかけなんて、それで充分だ。

告白したのはそれなりに勝算があるような気がしたからだ。相手にも気持ちがあるんじゃないかと期待するようなことはいくつかあった。手応えが何もいまま気持ち打ち明けられるほど、あの頃の自分は勇気のある少女ではなかった。

だが、返ってきたのは「ごめん」だった。

「俺は和泉とは住む世界が違うからって言われたんです。俺、施設で暮らしてるんだって」

施設の説明を聞いたところで、その頃の和泉には本やテレビのフィクションで漠然と培った孤児院のイメージしか湧かなかった。お父さんとお母さん、亡くなってるの？

そういう施設に入っているのなら、当然両親がいないのだろうと思ってそう尋ねた。

わたしはそんなこと気にしないよ。

むしろ相手に寄り添ったつもりで重ねると、相手は傷ついたような怒ったような顔になった。

ほらな。やっぱり世界が違うんだよ。

喋ったのはそれが最後になった。相手が避けるようになり、その理由が分からないまま卒業を迎えて、そのまま相手の消息は途絶えた。

よその県で就職して、社員寮に入ったらいいということだけ風の便りに聞いた。

何度か同窓会があったが、彼が姿を現すことはなかった。

「子供なりに、ちゃんと好きなんつもりでいたんです。それなのに、一方的に断ち切られた感じで、ずっと忘れられなくて……」

ほらな。やっぱり世界が違うんだよ。

最後に聞いたその言葉が胸に刺さって抜けない棘になった。いつもは忘れている、しかし季節の変わり目などに時折り存在を主張する柔らかな棘――

「わたしと彼と、どう世界が違ったのか知りたくて…… 分からずじまいで引き下がりがりたくないっていうか」

もし、自分が彼の世界を分かっていたら、あの恋が実る可能性はあったのだろうか。――それを確かめたかったのかもしれない。

高校生の頃の失恋話をくどくど語ってしまったことが急に恥ずかしくなり、慌てて目を伏せた。

すると猪俣が世間話のままの口調で尋ねた。

「彼との世界の違いは分かりましたか」(中略)

――自然に「はい」と答えていた。

「違いはありませんでした。ただ、わたしが知らなかっただけです」

人には人の数だけ事情があつて、環境がある。『あしたの家』だけとってみても、子供たちがここにやってきた理由は様々だ。世界が違うのではなく、同じ世界に住まう人にもいろんな事情があることを知らなかった。

家に帰れば当たり前のように両親がいて、家族がいて、その家の子供として当たり前のように愛してもらえ。育ててもらえる。それが世界のあり得べき基準であって、たまにその基準が欠落した不幸な人がいるだけだと、無邪氣に傲慢にそう思い込んでいた。わたしはそんなことに気にしないよ。――まるで慈悲でも与えるように。一体何様か。

「ずいぶん無神経なことを言ったんだなあって……」

わたしはあなたが基準を満たしていなくても気にしないよ。受け入れてあげるよ。彼にはきつとそう聞こえた。

「きつとね」

独り言のように、猪俣は和泉を見ずに呟いた。

⑧「彼は、あなたのことが好きだったんだと思いますよ」

「……そうでしょうか」

和泉も猪俣を見ずに呟いた。

「人の事情に貴賤をつけるべきではないというのは理想です。しかし、やはりハンデはハンデで、引け目はどうしたって引け目です。彼は、自分の引け目をあなたに晒したくなかったんだと思います」

傷ついたような怒ったような顔で、やっぱり世界が違うと言った。彼にとって誇れない家族がいたことは確かだろう。

――もし、「気にしない」じゃなくて、

「分かったって言うてたら、わたしを振り向いてくれたでしようか」

優しさをひけらかすように寄り添うのではなく、ただ率直に「分かった」と言っていたら。

分かった。でも好き。

今、巻き戻せるのならそれだけ言う。

「無理でしょう」

猪俣はそう言うて、顔の造りでどうしたって陰気に見える笑みを浮かべた。

「私にも覚えがありますね。あの年頃の男というのは、好きな女の子の前でかっこつけることに命を懸けているんです。自分のせいじゃないのにぶら下がってくる引け目は、あなたがどんなふうに告白していても、やっぱりあなたに晒したくなかったと思いますよ」

「猪俣先生も好きな女の子の前でかっこつけましたか？」

「すぐくっつけて告白したんですが、顔が好みじゃないと言われました」

猪俣の眉は八の字に下がって、ますます陰気な顔になった。

それがおかしくて吹き出したはずなのに、涙がやけに滲んで困った。

【場面④】

センチメンタルな志望動機を受け止めてもらった日から、猪俣が心の師になった。

猪俣の子供たちへの寄り添い方は、常に冷静さを失わないのに優しさが感じられた。

迷ったときは猪俣ならどうするのかを考えた。試し行動と呼ばれる子供たちの駆け引きに翻弄^{ほんろう}されそうになったときも、持ちこたえられたのは猪俣の指導のおかげだ。

施設は家庭ではない。職員は家族ではない。猪俣は新人に繰り返し^{かえ}そう言った。

私たちは子供たちの育ちを支えるプロでなくてはならない。

その割り切った物言いは、ともすれば理想に燃えている新人の反発を買った。

施設の子供たちにも愛情は必要だと思います。——着任初日の三田村のようなことを言う新人は大勢いるのだ。

施設は家であるべきだ。職員は家族として子供たちに愛情を注ぐべきだ。その理想は、一見優しく、正しく聞こえる。

三田村と入れ違いで辞めた同期の岡崎は、正にその理想に燃えているタイプだった。

子供たちとの関係をビジネスライクに割り切れと言うんですか。

「語弊^{ごへい}を恐れず言えば、そうです」

猪俣の言葉に揺るぎはなかった。(中略)

九十人の子供たちに家族のような愛情を与えることなど、一人の人間には不可能なことなのだ。求めのままに与え続けたらいつか枯渇^{こかつ}する。職能者^{さと}たれと論ず猪俣の教えは、和泉の羅針盤^{らしんばん}のように刻まれた。⑨児童福祉^{じどふくし}の世界で迷わないための羅針盤だ。

(有川浩「明日の子供たち」より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) *貴賤^{きせん}………尊いことと卑しいこと。身分が高い人と低い人。

*職能者………職務を果たすことを第一に考えるプロフェッショナル。

問一

——①「貝になり」について、あとの問いに答えなさい。

(1) これは、このときの「女子」のどのような様子を述べたのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の感情を必死に押し殺している様子。

イ 心を閉ざして相手に応じない様子。

ウ 無表情で冷ややかに相手に応じる様子。

エ 相手への敵意を内に秘めている様子。

(2) ここで用いられている表現法を何と呼びますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 直ゆ（明ゆ）法

イ 隠ゆ（暗ゆ）法

ウ 擬人法

エ 倒置法

問二

——②「ここを先途とばかりに声を荒げようとした梨田を、猪俣が手振りで止めた」とありますが、このときの「梨田」と「猪俣」の様子の説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 女子がようやく自分から謝ろうとしていることに気づいた梨田は、その前に懲らしめてやろうといきり立ったが、猪俣は、理由も聞かずに叱りつけるのは理不尽なことだといきどおって、梨田の行動を止めた。

イ 女子がようやく行き先を答えようとしているのに気づいた梨田は、先回りして彼女を怒鳴りつけようとしたが、猪俣は、行き先よりもその理由や動機を聞いてやることのほうが大切だと直感して、梨田の行動を止めた。

ウ 女子がようやく口を利きそうになったことに気づいた梨田は、このタイミングを逃さずに女子を追及しようとしたが、猪俣は、梨田がそうすることで彼女が再び口を閉ざしてしまうと判断して、梨田の行動を止めた。

エ 女子がやっと何もかも白状しようとしているのに気づいた梨田は、すかさず叱りつけようと焦ったが、猪俣は、せっかくながら始めた自分と女子との関係を梨田によって壊されなくなかったので、梨田の行動を止めた。

問三

——③「女子は泣きそうな顔で俯いた」とありますが、ここから読み取れる「女子」の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ダイコクに行きたかった本当の理由を打ち明けたのにそれができない、やるせない気持ち。

イ 明後日の遠足までには、どんなことをしてもニギビを治したいと、思い詰めたような気持ち。

ウ 無断外出を一方的に責めるばかりで、その理由をわかってほしいとしない大人たちに、いらだつ気持ち。

エ 他の大人とは違って猪俣なら自分の気持ちをわかってくれるだろうと、甘えかかるような気持ち。

問四

——④「もう遠い日になった中学生の時分が巻き戻った」とありますが、この一文の効果や役割の説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「明後日が遠足…」という言葉聞いた和泉が、一瞬にして過ぎ去った日々に戻り、自分にも遠足を楽しみにしていた無邪気であどけない日々があったことを思い出していることを読者に伝えている。

イ「明後日が遠足…」という言葉聞いた和泉が、遠足直前の浮き立つような子供心を今の自分が忘れていたことに気づき、今後は子供心を忘れずに彼らに寄り添っていかうと決意したことを暗示している。

ウ「憧れの男子と同じ班に…」という言葉聞いた和泉の心に、異性へのあこがれに胸を痛める思春期の複雑な感情が一瞬でよみがえり、彼女がこのときはじめて女子中学生の行動に共感を寄せたことを印象づけている。

エ「憧れの男子と同じ班に…」という言葉聞いた和泉が、自分にも異性にあこがれた淡い初恋があったことを思い出し、自分には女子中学生を責める資格がないと、改めて猪俣の対応に感服したことを印象づけている。

問五

~~~~~a「肩肘張った」、b「風の便り」とありますが、それぞれどういう意味ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

### a 「肩肘張った」

ア 体が固くなり、くつろげない様子で

イ 緊張して、肩が凝るような様子で

ウ 普段とはちがう、取り澄ました様子で

エ 意気込んで、強がって見せる様子で

### b 「風の便り」

ア 風のように姿形がなく、どこからともなく伝わってくる知らせ

イ 風のように吹きすぎていく、すぐに忘れてしまうようなはかない知らせ

ウ 風が山や川を越えて吹いてくるように、遠くの方から届けられる知らせ

エ 風が思い出を運んでくるように、なつかしさを呼び起こすような知らせ

## 問六

——⑤「心の中にしまっておいた本当の動機を話す気になったのは、ニキビの一件があったからかもしれない」とありますが、和泉が猪俣に「本当の動機を話す気になった」のは、なぜだと考えられますか。その理由にあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大人から見ればたわいのない子供の悩みを、相手の立場に立って真面目に受け止めた猪俣なら、同じように自分のことも受け止めてくれるのではないかと思ったから。

イ 女子中学生の問題行動を処理した猪俣の対応の中に、子どもの心に寄り添う真の優しさを感じ取り、同じ児童養護施設で働く職員として親しみや敬意を感じていたから。

ウ 女子中学生の問題行動をめぐって、上司が自分とは異なる対応をしようとしても、自分を譲らずに指導を貫いた猪俣のゆるぎない姿勢に、信頼を寄せ始めていたから。

エ ニキビの一件で尊敬するようになった猪俣に対して、過去の苦い体験に基づく「本当の動機」を隠し続けることに、うしろめたさを感じるようになっていたから。

## 問七

——⑥「その理由が分からないまま」とありますが、当時分からなかった「その理由」を、現在の和泉はどのように考えていますか。その説明となる次の文の空欄には、いずれも本文中の言葉が入ります。(1) (3) に入る言葉をあとのア～カの中から選び、記号で答えなさい。

高校時代、「彼」が自分を避けるようになったのは、自分の「(1)」という一言が原因で、自分はそれを相手に寄り添うつもりで口にしたのだが、一方の「彼」は「(2)」という意味でその言葉を受け止めたのだと気づき、当時の自分は「(3)」寄り添おうとしていただけなのだと、「その理由」を振り返っている。

ア お父さんとお母さん、亡くなってるの？

イ わたしはそんなこと気にしないよ

ウ やっぱり住む世界が違う

エ あなたが基準を満たしていなくても気にしないよ

オ 子供なりに、ちゃんと好きなつもりで

カ 優しさをひけらかすように

問八 ——— ⑦『ただ、わたしが知らなかっただけです』とありますが、和泉は、自分がどのようなことを「知らなかった」と述べている

のですか。その内容として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 児童養護施設で暮らしている子供といっても、それぞれに事情があり、その一つ一つは異なるのだということ。

イ 自分の世界を基準にして、それを満たしていない人を不幸だと決めつけるのは思い上がりなのだとということ。

ウ 家に帰れば温かく迎えてくれる両親や家族がいるというのは、決して当たり前のことではないのだということ。

エ 住む世界に違いはあっても、人は互いに寄り添うことができれば、それを乗り越えられるのだということ。

問九 ——— ⑧『彼は、あなたのことが好きだったんだと思いますよ』とありますが、猪俣がこうに言ったのは、「彼」の行動をどのよ

うに理解したからですか。四十五字以上五十五字以内で説明しなさい。

問十 ——— ⑨「児童福祉の世界で迷わなかったための羅針盤だ」とありますが、ここでの「羅針盤」とはどういうことですか。和泉にとって

猪俣が「羅針盤」であることが簡潔に述べられている二十五字以内の一文を【場面④】に求め、最初の五字をぬき出しなさい。

三

次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① あの人|は将来|ユウボウ|である。
- ② 病|氣をコウジツ|に欠席する。
- ③ 休|日をヘンジョウ|して働く。
- ④ 失|敗のヨウイン|を考える。
- ⑤ ジュウギョウイン|をやとう。
- ⑥ 物|音で目をサ|ます。
- ⑦ ゼン|は急げ。
- ⑧ 無我ムチュウ|でさがしまわる。
- ⑨ プロの選|手としての自|負がある。
- ⑩ 不|作法をあやまる。
- ⑪ 性|格は十人十色|だ。
- ⑫ 年|賀状を刷|る。